

『月刊 わらじ』

の表紙

2024年1月号～12月号

2024年1月1日 毎月1回1日発行 通巻544号  
1984年10月4日 第三種郵便物認可 頒価 200円

# 月刊 わらじ 1月号

特集 わんがまんが

二〇二四年一月一日  
一九八四年十月四日

毎月一回一日発行  
第三種郵便物認可

通巻五四四号  
頒価二〇〇円



2024年1月1日 毎月1回1日発行 通巻544号  
1984年10月4日 第三種郵便物認可 頒価 200円

# 月刊 わらじ 1月号

## 特集 ねんがまんが

二〇二四年一月一日  
一九八四年十月四日

毎月一回一日発行  
第三種郵便物認可

通巻五四四号  
頒価二〇〇円



2024年をみなさんと一緒に迎えられたことをうれしく思います。新年号の表紙は、クリスマス報告が恒例です。「わらじ三大行事」の一つとされてきた「みんな一緒にのクリスマス」は、参加者同士が互いを知るという意味では、寝食を共にする「交流夏合宿」にはかなわないし、知った顔や知らない顔のだからと気軽に言葉を交わしたり相談したりするには、プログラムがない「わらじ大バザー」のほうがやりやすいかもしれません。

にもかかわらず45年間続いてきたのは、ここが「ちがいを楽しむ場」だから。世の中、ちがいが格差になったり、差別や自然破壊、戦争にもつながるいま、舞台と会場のしきりを越え、入り混じって、歌い踊り競い迷うことがどんなに貴重か。ちがいが合わさって味わい豊かなこの星であるように！

そして、2023年の「みんな一緒にのクリスマス」では、NPO 法人障害者の職場参加をすすめる会代表理事の尾谷英一さんが、(株)ニューオタニを拠点に活動する障害者スポーツの参加者たちを大勢誘って参加し、アーティスト達(ワイプ写真)も紹介して下さり、なんと参加者の30%を占めました！

「わらじ三大行事」と言いますが、その三つに「月刊わらじ」を加えた活動が「わらじの会」のほぼすべてです。「わらじの会」とは組織というよりもその時々「出来事」です。誰もが組織、システムに組み込まれ、その一部として働かざるをえない今の世の中で、他者と出会い、自分の中の他者とも出会い直し、日常をもみほぐし編みなおす営みを、今年もご一緒に続けたいと思います。

# 月刊 わらじ 2月号

## 特集：すまいにいます

二〇二四年二月一日  
一九八四年十月四日  
毎月一回一日発行  
第三種郵便物認可  
通巻五四五号  
頒価二〇〇円



今月9日に開かれた TOKO ミニおしゃべり会。TOKO とは「どの子ども地域の学校へ！公立高校へ！東部地区連絡会」。会場は生活ホームオエヴィスの食堂兼台所。切り口は学校だが、こだわらず暮らしのよもやまを語る。DK というより茶の間という「住まい感」は、ここができた30数年前に通じる。

この木造平屋を建てたのは、江戸時代から代々この地で農家を営む父。長年家の奥の暮らしを強いられてきた重度障害の姉妹の自立を願い分家として。最期の仕事の結果を見届ける前に逝去。障害のある人となない人が共に生きる街づくりを進めてきたわらじの会の面々が寄ってたかって、ほかに3人の入居者、世話人、交代で介助に入るボランティア(一部のみ有償)を募り、発足したばかりの県単独事業「心身障害者生活ホーム制度」を活用してスタートした。それからまもなく33年。

重度障害の妹は大家と利用者を兼ねた。すなわち、家、土地のしがらみをひきずり、組み込んで、公的な制度を生かした。そして、姉妹が逝って久しくなり、老朽化、周辺環境、入居者、法制度等の変化により、存廃が検討されている。

この過程で起こしてしまった入居者への虐待事件と改善報告については、社福・つぐみ共生会、NPO かがし座両法人 HP を参照されたいが、それらとは別次元の課題として、冒頭の「住まい感」の大切さを思う。かの姉妹は、小学校低学年で「来ねえでいい」とされ、家の奥で生きた。ずっと後に自立し解放されたのは姉妹だけではない。親族もご近所も、関わった団地住民も自立し、解放されたんだということが大事だ。バザーをやったら小学校の担任も訪ねてきた。だから、安全・安心に管理が行き届いた施設でもだめ。分けられ、差別に組み込まれた同士が出会い和解する、「住まい」が大事。

# 月刊 わらじ 3月号

## 特集：春一番

二〇二四年三月一日 毎月一回一日発行  
一九八四年十月四日 第三種郵便物認可  
頒価二〇〇円



「春一番」という言葉を定着させたのは民俗学の大先達・宮本常一で、1959年に出版された「俳句歳時記」編者として関わり、この「春一番」という言葉を採取し、次のように書いたという。「春一番(仲春)【解説】沓岐で春に入り最初に吹く南風をいう。この風の吹き通らぬ間は、漁夫たちは海上を恐れる。(宮本常一)」

わらじの会の初期の活動に刻まれた「春一番」は上のスケッチに吹く風。1987年3月5日の活動日誌に描かれた。当時春日部市内牧に借りていた畑作業中のシーン。小学校低学年で就学免除にされ農家の奥で育った新坂光子・幸子姉妹が、畦道の電動車いすから、畑の中で作業する介助者や歩ける障害者仲間に向かって、あせい、こうせいと指示を出す。

この日の午後は畑をみんなでうない、酸性土壌を中和するために石灰60kgをまけとの指示。桶を荒縄で腰に固定した介助者のSさんが、その桶に石灰を入れて畑にまく。風が強くもうもうたる白煙がまきおこる中での作業。いったん休もうと一緒に作業していたメンバーに声をかけたところ、急に行動を中断されてパニックになったAさんが石灰まみれの手でSさんの顔を叩き鼻血が出る。Sさんの顔は、まるで白粉と紅で祭り化粧のよう。

やはり重度障害の新坂きみ子さんと一緒に自分の車で後からついた父・新坂近雄さんがぼそっと「石灰は午前中にまくもんだ」と一言。午後からは風が吹き、畑では風が回るからだ。

戦後日本の高度成長の中で多くの人々が故郷から追い出され都会に集住させられる一方で、家の奥や施設に閉じ込められた人々も少なからずいた。わらじの会は、後者が街で生きることと同時に、前者が他者同士出合い、街を共に生きる場にしてゆくべく、手探りで「春一番」の中を歩んでいた。

# 月刊 わらじ 4月号

## 特集 はじまり



入学式会場から出てくる新入生に向けて「おめでとうございます。わらじの会で～す。」と手渡されるチラシ。4月2日の風景。

うれしそうに近づいて受け取りに来る人、不安でこわばっている人、淡々ともらって通りすぎる人…みんなそれぞれだが、こんな直接の出会いが大事だ。先日卒業した全国の先輩世代はそれを奪われた。「失われた4年間」と語られる。そこで失われた日常が戻ってきた。

だが、コロナが「普通の風邪」になり、こんな出会いが戻ってきたことを素直に喜ぶだけでいいのだろうか。この4年間に見えてきたこと…「感染差別」、「自警団」、「不要不急」、「隔離」、「一斉休校」、「自宅待機」、「緊急事態」…日常の底で膨らんできていた社会のありようが間歇泉のように噴き出した。あの瞬間、瞬間を大事にとどめたい。対面復活に喜んでいるだけではなくて。

そう思ったら、40数年前のまだ制度が皆無の時、発足間もないわらじの会が、こんな風に、ある専門学校の前でチラシをまいていたシーンがフラッシュバック。縫製工場の寮から夜間のクラスに通う学生たちがチラシを見て、例会や夏合宿におおぜい参加してきた。沖縄出身者が複数おり、沖縄返還から10年の頃。彼女たちの過酷な労働によって本土の斜陽産業が束の間息をついた。都市化で解体される農家の奥で追い詰められた重度障害者たちは、そのウチナンチュの介助で共に街に出た。障害者たちと歩きながら、「私たち売られてきたの」と冗談めかしてつぶやいた。

大事なことは「対面」という形式だけでなく、その出会いを通して互いの関係や背景を、そして自分を、世の中を見つめ直すこと。一緒に街を歩き、たくさんのバリアに出会うことがおすすめ。さらに、一緒に遊ぶこと。支援する・される、守る・守られる…必要だがバリアにもなるシステムをこえて。

二〇二四年四月一日  
一九八四年十月四日

毎月一回一日発行  
第三種郵便物認可

通巻五四七号  
頒価二〇〇円

2024年5月1日 毎月1回1日発行 通巻548号  
1984年10月4日 第三種郵便物認可 頒価 200円

# 月刊 わらじ 5月号

## 特集：こども

二〇二四年五月一日  
一九八四年十月四日

毎月一回一日発行  
第三種郵便物認可

通巻五四八号  
頒価二〇〇円



地域活動支援センターパタパタとくらしセンターべしみの面々を中心にしたわらじの店は、今年も例年同様、駅と市民グラウンドのちょうど中間点あたりの十字路の角に開かれ、にぎわっていた。

わらじの会では30年ほど前に藤まつりに出店し始めたが、その時はトムテとぶあくという二つの店の障害者と主婦が中心で10人くらいで店を出していた。当時は祭りの人出もずっと少なかった。

近年では年度初めの学生ボランティア募集の目的も含め、障害当事者や支援者が多数参加する活動となっている。そして、祭り自体もコロナによる3年の中断を経て、前にもましてにぎやかになった。

出店場所が角地なので、店のテントの外でおしゃべりや情報交換の空間ができ、1年ぶり、数年ぶりの人。あわせて50人程の人が出入りし、近況報告を交わすフリースペースが出現する。

さまざまな人々が関わり合って出店を支えているが、とりわけ30年前から現在まで関わり続けている主婦パワーの存在は欠かせない。この間、福祉サービスは一挙に整備されたが、支援員に囲まれた暮らしが私たちのめざしてきた「地域で共に」と同じなのだろうか？べしみやパタパタやわら細工を活かしつつも、そこに関わりのない家族やご近所や知人ほかの他者の流れの中でこそ、みんな生きてるんだと、初めて実感できるんじゃないか。

2024年6月1日 毎月1回1日発行 通巻549号  
1984年10月4日 第三種郵便物認可 頒価 200円

月刊

わらじ 6月号

特集：ずるい

二〇二四年六月一日  
一九八四年十月四日

毎月一回一日発行  
第三種郵便物認可

通巻五四九号  
頒価二〇〇円



写真は知人ぞ知る月刊わらじ・巽優子編集長。毎月第一火曜の夜は編集長宅で編集作業が行われ、こんな風に編集長自ら電話で原稿依頼をすることもしばしばである。電話をかける先は、元1年間ボランティアなど、かつて親しく付き合った相手か現在活動に関わっている人などが多いのだが、編集長がユウコ風大阪弁で告げる特集テーマが聴き取れない人が多く、クイズ番組のようなやりとりになり、時に大爆笑にもなる。実は今月の特集テーマ「ずるい」は、四半世紀前、まだ編集部ではなかった彼女が、「さっこさん、ずるい！」と声を発し、その言葉が後に越谷市で知的障害者介護人派遣事業として実を結ぶことになる歴史的なワードなのだ。

「さっこさん」とは、当時生活ホームオエヴィスの大家兼入居者だった故新坂幸子さん。幸子さんが全身性障害者介護人派遣事業を使って、主婦や学生に有償ボランティアとして介助に入ってもらいながら地域で暮らしていることを、巽さんは少し前に知った。巽さんが特に好きな主婦も、生活ホームで幸子さんの介助に入っていた。巽さんは生活ホームに日参する中で「ぜんしんせい」の秘密を知ることになる。だから、この「ずるい」は非難ではなく、「知らなかった！ならば自分たちだって」の叫び。

巽さんは母と先進地・大阪へ視察に行き、週1日越谷市民ネットのケーキ屋「AMI」の店番と送迎に、越谷市障害児者ホームヘルパー派遣事業を使ったりしながら、どんな介助が自分にあっているのか皆で、一緒に動き確かめた。そして、越谷市は1989年、知的障害者介護人派遣事業を発足させたのだ。

どんな専門家でもつきあいが浅ければ不可能な地域社会への参加の介助を、その人の隣人・友達としてつきあっている人はごく自然に、つきあいの延長(として双方向で)行える。

もちろん、居宅や施設内での介助や医療的ケアをはじめ、専門的知識や経験に裏付けられた介助に支えられてこそ生き抜けることもとても大事。ただその大事な体制整備を急ぐあまり、あたりまえのことが忘れられているのではないか。

2024年7月1日 毎月1回1日発行 通巻550号  
1984年10月4日 第三種郵便物認可 頒価 200円

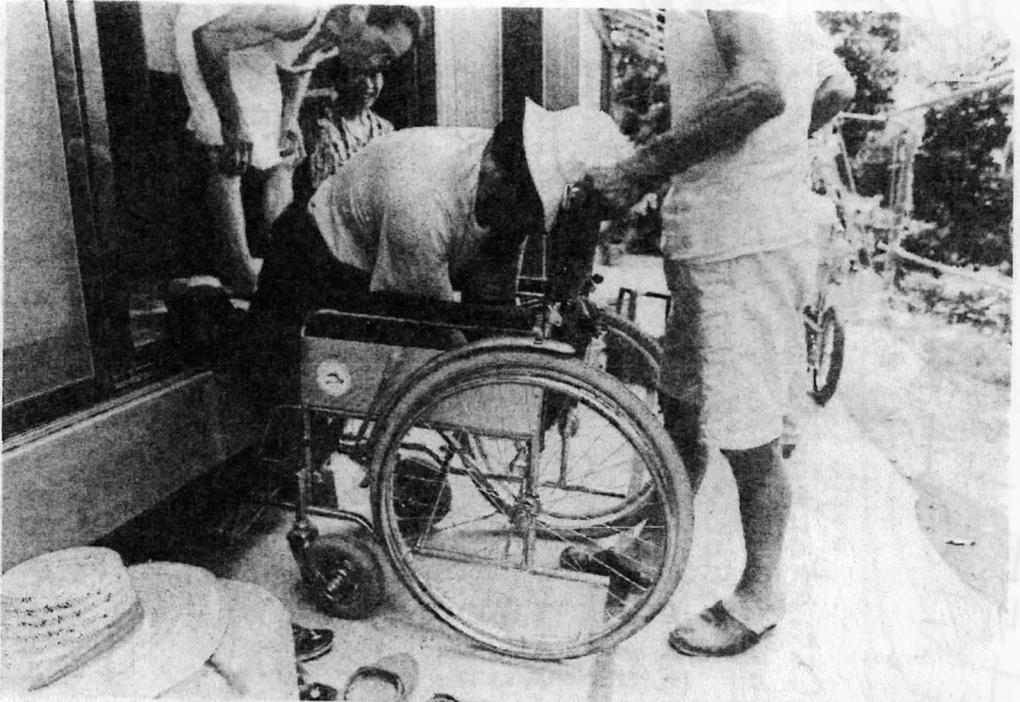
# 月刊 わらじ 7月号

## 特集：あのひとこと

二〇二四年七月一日  
一九八四年十月四日

毎月一回一日発行  
第三種郵便物認可

通巻五五〇号  
頒価二〇〇円



活動の日の朝 光子さん 1981年夏 (撮影：斉藤 憲)

まもなく今年も埼玉障害者市民ネットワークの「総合県交渉」の季節が来る。総合県交渉が始まったのは、1987年。バブル景気の真ただ中だった。

国民総生産は、アメリカを抜き世界第1位になったものの、株価・地価の上昇は資産を持たない人との格差を生んだ。また、政治・経済・文化・情報の東京への一極集中がすすみ、地方との格差が甚だしくなった。当時の畑革新県政も、東京に追いつき追い越せと養護学校や障害者施設の整備に力を入れていた。

そんなバブルをひっくるめてパチンと消した「あのひとこと」。

「おれらも かぞくのせやになんねえで

まちのなかでいきてえ

ちじさん かんがえてくろろ」

越谷市恩間新田の農家のどんづまりの部屋に、重度障害者3人と難聴の祖母と老母と、5人が身を寄せ合って生きてきた薄暗闇の奥から発せられた(写真)。欧米型自立生活とも青い芝の解放運動ともやや異なる「あのひとこと」。

2024年8月1日 毎月1回1日発行 通巻551号  
1984年10月4日 第三種郵便物認可 頒価 200円

# 月刊 わらじ 8月号

## 特集 せんそう

二〇二四年八月一日  
一九八四年十月四日

毎月一回一日発行  
第三種郵便物認可

通巻五五一号  
頒価二〇〇円



今月号も40年前の貴重画像。前のお二方がどなたかわかりますか？ヒントはどちらも月刊わらじの常連執筆者…… そうです！向かって左の笑顔の方は橋本克己さん。はじらいを見せる右の方は吉原満さんです。今月号の特集テーマは「戦争」ですが、克己さんはこのころまだ、時折り自宅を破壊したり、家族へ暴力をふるったり、日々内戦をしていました。彼を20歳まで家の奥に閉じ込めて、友達も言葉も奪い続けた元凶は、日本という国家ですが、克己さんからは家族しか見えていなかったからです。

克己さんは、それから40年、前半は「未確認迷惑物体」として、人々を大渋滞にまきこみながら、後半は「介助付きドン・キホーテ」として思い姫の大いなるまなざしの下で冒険を重ねながら、共に生きる世界を探し続けています。奪われた20年は返ってきませんが、＜弱さ＞を＜強み＞に変えて生き（天島大輔）、国家と向き合って生きています。写真の笑顔は、そのスタートラインだったのです。

季刊民族学 186 の「特集 争いの終わらせ方-紛争解決と共生の人類学」では、世界で最多の戦乱を経験し最多の犠牲者を生んだアフリカでの共生の知恵について報告しています。「(欧米近代のような)個人主義的人間観に立てば、加害者を特定し、社会から隔離して処罰することが『正しい解決方法』だが、アフリカの人間観に従うと、加害者を社会のなかにとどめ、これからともに生きていくための方策が『正しい解決法』になる。」

エマニュエル・トッドは、「アメリカは血まみれの玩具のようにウクライナを利用した」、「この戦争はロシアとアメリカの戦争であることがはっきりしてきた」、「アメリカは支援することで実はウクライナを破壊している」と指摘し、この事実自体が日本を含む他の国々に対して「果たしてこの戦争にコミットすべきなのか」と問いかけていると述べています。(第3次世界大戦はもう始まっている)

戦争の背後には、差別、抑圧、搾取という人と人の関係があります。人と人が出会い、せめぎあいながら共に学び、共に働き、共に暮らすことを探りつつ生きてゆくことでしか、戦争は終わりません。

2024年9月1日 毎月1回1日発行 通巻552号  
1984年10月4日 第三種郵便物認可 頒価 200円

# 月刊 わらじ 9月号

## 特集 あれ、まちがってる

二〇二四年九月一日  
一九八四年十月四日  
毎月一回一日発行  
第三種郵便物認可  
通巻五五二号  
頒価二〇〇円



あれ？まちがってる……今月号の特集テーマも、本誌・巽優子編集長の一言により決定。

片マヒを伴うダウン症児として生まれた彼女は、出生時から「異常」(まちがってる)と診断され、発達の過程はもちろん、成年そして加齢に伴う「障害」、「二次障害」等の「まちがってる」という評価に、常にさらされて生きてきた。定型に近づく努力を強いる社会への反抗心を絶やさなかった。

表現はその都度さまざまであれ、100万回は言われてきただろう「まちがってる」を、いつの間にか自分の側に取り込んで、思いがけない時に、一言のラップのように世界に投げ返す。それがちょうど8月第1火曜夜の巽宅編集会議に重なった。

サン＝テグジュペリの「幸福の王子」では、キツネが王子に「仲良くなる」とは「あるものとそのあるものが同じ形をしていてもまったく違う感情を抱くことができること」だと語る。

THE BLUE HEARTS は歌う。「見てきた事や聞いた事 これまで覚えた全部 でたらめだったら面白い そんなことあるでしょうか」

写真は先月初めのわらじの会夏合宿。コロナ禍で3年間休んだが、78年以来、45年間開催している。電車やバスといった公共交通を利用し、希望する障害のある人ない人が一緒になって、山や海へ出かけ、寝食を共にして遊ぶ。多くはたまたま同グループや同室になった人同士が介助も含めて旅の道連れとなる。介護・支援のプロかアマかは脇に置いて。ごちゃごちゃの世界旅行。

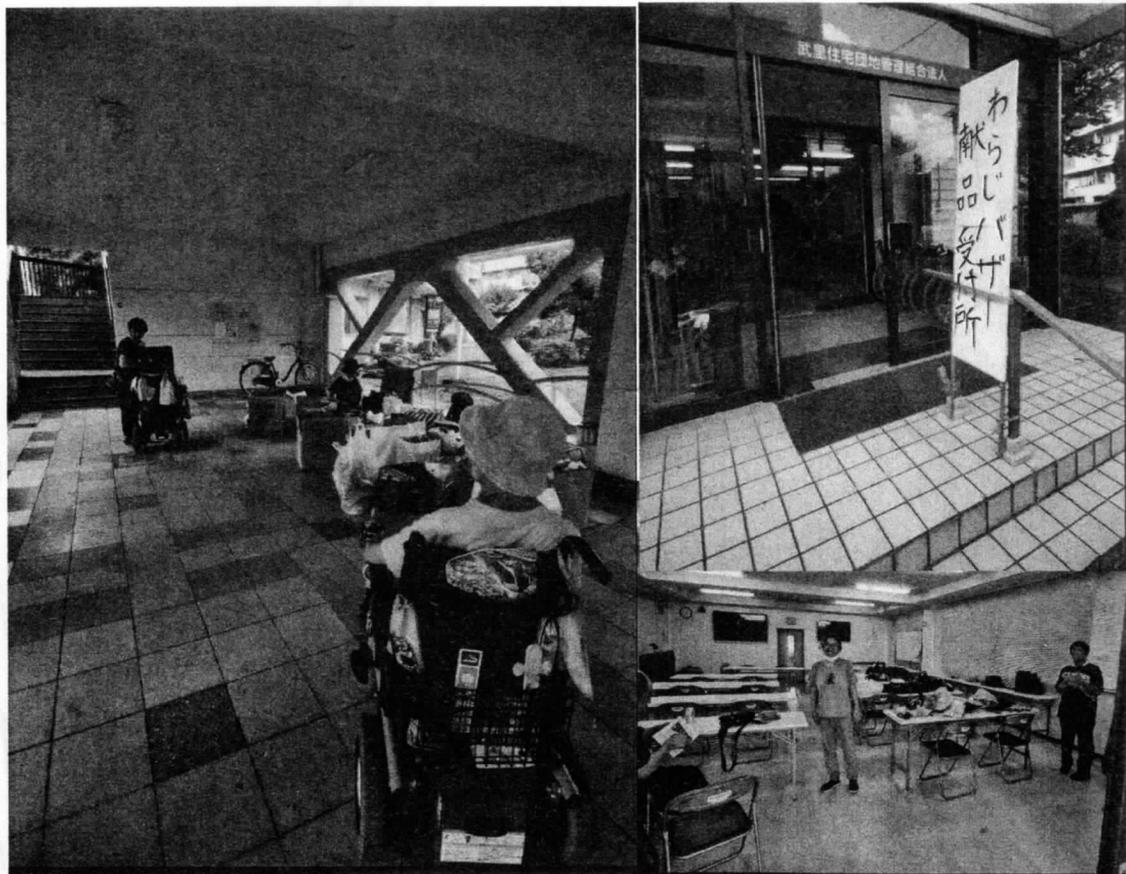
「あれ？まちがってる」 いやいや、それもありがたかった。答えはひとつじゃなかった。駅のトイレにいった人が小刻みにしか歩けないのを見て、車掌さんが発車を待っていてくれたりもした。「仲良くなる」とは「あるものとそのあるものが同じ形をしていてもまったく違う感情を抱くことができること」。

2024年10月1日 毎月1回1日発行 通巻553号  
1984年10月4日 第三種郵便物認可 頒価 200円

# 月刊 わらじ 10月号

## 特集：よくいくよ

二〇二四年十月一日  
一九八四年十月四日  
毎月一回一日発行  
第三種郵便物認可  
通巻五五三号  
頒価二〇〇円



この3枚の写真は、説明なしでわかる人は少ないだろうけど、どれもわらじ大バザーに向けて春日部市武里団地で行われた「物集め」の情景。向かって左は東地区集会所、右の2枚は五街区集会所で。「物集め」というだけあって、障害当事者たちが出張して行くからお賽銭もとい品物を持って来てくださいという方式。この方式は、わらじの会の中に「自立に向かってはばたく家準備会」という当事者組織(いまはない)が、1981年にできてから40年余り続けられてきた。

わらじの会関係者でも「はばたく家(準)」の名を知る人が少なくなっている今、こうして年1回、秋に集会所に出張って、品物を届けてくれる住民の方々に挨拶したり、その場で昼食をとり、一日を過ごす障害者と支援者も、自分たちのことを「よく行くよ」と思うことがある。バザー品のこうした集め方の例を、全国他の地で聞いたことがない(例がありましたら、編集部までご一報を)。

「当事者パワー」というだけではない。団地・地域の人たちの側の「よく来るよ」という季節感というか、渡り鳥を迎えるような心のありようとあいまって、ここに土着しかけているのだと感じる。

# 月刊 わらじ 11月号

## 特集：わかりあえないこと

二〇二四年十一月一日 毎月一回一日発行 通巻五五四号  
一九八四年十月四日 第三種郵便物認可 頒価二〇〇円



写真は、今月1日(金)に行われた「うんとこしょ いっしょに歩くことからはじめよう」(生活クラブ越谷ブロック地域協議会、NPO 法人障害者の職場参加をすすめる会、越谷市民ネットワーク、ケアシステムわら細工など共催)の様子。新越谷駅西口から生活クラブの店・デポー越谷まで歩き買物、休憩の後、サンシティまで歩き、感想共有など交流した。

31名の参加者からたくさんの感想が出た。30分延長したほど。とりわけ、今月号のテーマである「わかりあえないこと」の確認がいかに大切を感じさせられた。

たとえば、車いすや歩行者、ストック等歩いて歩く人にとってハードルとなる段差だが、視覚障害で白杖で状況を確認して歩く人ではその段差を標識としていたり、道を曲がる時に壁にあえてぶつかってゆき2歩手前で曲がると語られた。ただ、これをもって、車いすは、視覚障害はと一般化はできない。

南越谷の街の歴史の話も出た。大昔田圃だった所を、部分改修を重ねてきて、地盤沈下箇所もあるので、千間台や新三郷などと比べ、段差や障害物が目立つ。が、それ他者に手を貸す・手を借りるという風土の有無で変わって来るだろう。それは一方向的な「思いやり」だとか「やさしさ」だけではなく、「わかりあえないこと」を前提として、相手の語り、身ぶりを受けながら試行錯誤してゆくことだろう。

市職員さんは、同行して認識の修正を迫られた、そのことによって人間として成長したのではと語った。学生さんは、道路のバリアを「電車はスムーズに乗れるのに」と対比させた。その「スムーズ」の背後には「誰もが使える駅を求める会」の歴史があったことを想い起した。

「わかりあえない」からこそ一緒に歩いてみる、一緒に動いてみる。そこからはじめよう。

2024年12月1日 毎月1回1日発行 通巻555号  
1984年10月4日 第三種郵便物認可 頒価 200円

月刊

# わらじ 12月号

## 特集 私の三たニュース

二〇二四年十二月一日  
一九八四年十月四日

第三種郵便物認可  
毎月一回一日発行

通巻五五五号  
頒価二〇〇円



月刊わらじとは何か？会関連の事業の予告や報告がこんなに少ない会報は、あまり見かけない。会報とか機関誌というよりは、同人誌に近いかもしれない。では同人誌ってなんだ？ウィキペディアを参照したら「同人（同好の士）が資金を出して、自ら執筆・編集・発行を行う雑誌のこと」とあったが・・・？あなたにとって、月刊わらじってなんですか？

編集長（編）が副編集長（副）のスマホを使って原稿依頼している様子を誌上収録。相手は元1年間ボランティアでわらじに逗留してた旧坂田さん（母）と娘さん（娘）。

編「しんごうなんですけど まちがってる なんで」母「かよちゃんです」娘「かよちゃんです」編「かよとちゃうねん・・・たつみゆうこ」母「はい たつみゆうこ はい こちらははい〇〇かよです」娘「〇〇かよです」編「じゃ よろしくおねがいます わかったでしょ よろしくね」母「はい あのう ねんがまんがでいいですか」編「そう そうですね」副「あのねえ 郵送6日間かかった この間」母「あら わかりました」副「6日」母「けっこうかかりますね」副「手紙は6日間かかってた だからネットで送るか もっと早く送って」編「早くするのはけっこうですので」母「つぎ締め切りは？」副「17って」編「ちょっと待ってくださいん 2月の・・・24かな」副「17って言ってください」編「17です」母「はい」副「よろしくおねがいます」編「よろしくおねがいます ぎりぎりなので おねがいます」母「わかりました」編「じゃよろしくください」母「はい おやすみなさい」娘「おやすみなさい」編「はい よろしくおねがいます」母娘「ばいばい」副「はいはいはい」今年もご愛読ありがとうございました。